

理事長に聞く

日本の大学が直面する問題と変化

福田 勝 幸

(拓殖大学理事長)

世界で活躍する「拓殖人材」を育てる

——今号の『海外事情』のテーマは、「時代の大転換期」です。政治・経済から宗教・社会が直面する課題を地域研究の視点から取り上げます。ズバリ、教育の現場が直面する課題は何でしょうか。

福田 時代の変化の波は教育の現場にも押し寄せています。AIに代表される技術革新が企業を変え、産業界が求める人材にも影響を及ぼしています。大学の役割にも変化が求められ、対応にはスピードも重要になってきています。大学はそのことを意識しなければなりません。そういう意味では二〇一八年、大きな決断をしました。

きっかけは私を訪ねてきた一人の学生の発言です。その学生は、「海外留学をするために休学するのに授業料を半分も払うのはおかしい」と言うのです。実はネットでは異論もたくさん出ていたようです。その学生は同じ意見を持つ学生の署名を一〇〇人以上集めて、嘆願書とともに私のところに持ってきました。私は、「なるほど、よくわかった」と答えました。ただ、私一人で決めるわけにもいかないので、学長や他の理事、職員と相談しました。それが一八年末だったと記憶しています。大学も組織である以上、急にシステムを変えるのは簡単ではありません。しかし私は、これは先延ばししてはいけな思考え、次年度からでもやろうと決めました。いま、拓殖大学は海外留学による休学は在籍料の支払いだけにす

るようにしました。

——いま、日本の若者は内向きになり海外に積極的に出ていこうという気概に欠けると言われますが、その背中を少しでも押すことになりますね。

福田 学生にはこれまで以上に海外に出て見聞を広めてほしいと思っています。そのための環境整備です。これまで大学の留学制度はほとんどが長期留学でしたが、短期でも学生をどんどん海外へ出そうという方針に切り替えたのです。できれば休学して、自分で留学先を探して一年くらい外に行きなさいと。二〇一八年までは休学でも授業料の半分を納めなければなりませんでしたが、い



ふくだかつゆき

1944年青森県生まれ。1967年拓殖大学商学部貿易学科卒業。拓殖大学学生主事、学務部長、総務部長、事務局長、常務理事を経て2011年より現職。

まは在籍料五万円を払えばよいというシステムに切り替えたのです。海外に飛び出そうという学生に、障害があらはなりません。

——思い切った決断ですね。

福田 日本社会にはいま時代の閉塞感が蔓延しています。経済の先行き不透明感も関係しているのでしょうが、明るい未来を創造することが難しくなっています。そんな行き詰まった雰囲気を打ち破るのは人材です。その礎として、新しい世界に果敢に飛び出していける学生を育てることは、大学の大切な使命の一つではないでしょうか。

——海外雄飛は現状打破の一つの突破口なのですね。

福田 拓殖大学は、「積極進取の気概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を具えた有為な人材の育成」を建学の精神に掲げています。私は、理事長として経営の責任者ですが、教育面を担当している学長とは普段からよくコミュニケーションをとり、経営と教育のバランスをとりながら教育改革にも取り組んでいます。私は毎年の予算を組むに際し建学のミッションとその年の「時代認識」を必ず書くようにしています。二〇二〇年は建学一二〇周年です。その時代をどう捉えるのか、

学校を運営していく上で重要なことだと考えています。

現在の日本は、少子高齢化という問題と向き合っています。最近では、労働力の不足から外国人を呼び寄せようとする動きがあります。二〇二〇年はオリンピックが東京で開催されます。それに伴って外国人観光客も著しく増えてきました。浅草に行けば毎日のように様々な国から来た観光客でにぎわっています。このような多様化する日本社会の中でどのような教育が求められているか——。こうした声に応えていくのがこれからの大学教育のあり方だと思います。

拓殖大学は、「世界にいちばん近い大学へ」をスローガンに掲げています。現在、交流・提携している海外の大学・機関は二二カ国・地域の五二にも及びます。留学などを通じた交流は、本校が長年力を入れて取り組んできたことの一つです。

どんなことでも始動の時には勢いがあります。しかし、時間の経過とともに新鮮味を失い勢いも削がれていくものです。ですから、ここで勢いに再点火してもう一段高みへと導いていかなければならないと考えたわけです。

具体的には、まず英語教育をさらに拡充させなければならぬでしょう。そして、海外との交流も見直します。

二〇二〇年度から外国語学部国際日本語学科を加えスタートさせます。日本語を原動力として世界の舞台で活躍できる人材を育成することが目標です。名前こそ日本語学科ですが、そこでは日本人と留学生の両方を受け入れて学ばせるという特徴があります。本校では、戦後のかなり早い段階から留学生を受け入れてきました。その伝統を活かし、日本語教育、日本文化、企業文化などをカリキュラムに組み込んでいきます。

——言語と同時に日本文化や企業文化も学んでいこうという試みは斬新です。

福田 本校の留学生もかつては母国に帰る者が多かったですが、現在は約七割の留学生がそのまま日本で就職しています。ならば、彼らにきちんと日本語や日本文化、そして日本企業文化と礼節を含めたケアする教育が必要だと考えたのです。拓殖大学のタフな国際人、つまり「拓殖人材」を作ろうとの狙いがそこにはあるのです。

日本では、少子化の進展に従い、外国人の受け入れをどうするのか、という議論が高まってきました。単純に人手がないから、または学生数が減っているからといった安易な理由から外国人労働者や留学生を増やそうとする傾向も強まっています。しかし、長い視点で見た

時、それでは外国人が日本社会へ貢献することはできません。むしろ、多様な人材を入れて、きちんと教育し、受け入れることで日本がさらに強くなっていくことが大切です。まさにラグビーワールドカップの桜ジャパンです。日本のあるべき姿が、あのチームに投影されていたと思います。複雑化する国際競争の中で、日本人だけで闘うという時代はもう過ぎ去りました。優れた外国人と一緒に、チーム一丸となって闘っていく。これからの日本にこそ、まさに必要な要素ではないでしょうか。

拓殖大学には、もともとそうした建学精神があります。その特徴を再見し、さらに強化していくことが重要でしょう。

——まさに時代認識がそこに反映されていますね。

福田 はい。日本の学生のためにも交流の場を設けていく必要はあります。大学にいながら留学生と触れ合い、国際文化に触れられるキャンパスづくりが目標です。いまの日本は内向き傾向が強いと言われ、なかなか海外で勉強しようという学生はいないのです。

昔、拓殖大学の学生は積極的に海外へ出ていました。そして、後輩がその姿を見て後に続いていました。本校の卒業生は、世界各地で今も活躍しています。ミャンマー、

台湾、ロサンゼルス、ブラジル、インドネシア、ベトナム、中国、香港、タイなど、そして今ではそうしたところと同窓会の支部ができて、本校との大きなネットワークができています。今の日本に欠けているのはそうした人材です。外へ飛び出す勇気が日本には必要です。次の時代に、世界のステージで活躍できる学生を育てる——。それこそが、拓殖大学のミッションです。

「教育ルネサンス2030」

——そのためにも、本学は様々な改革を行ってきましたが、その点についてもお話を伺えないでしょうか。

福田 私は二〇一九年で理事長として第三期を迎えたわけですが、常務理事として勤めていた八年間と、理事長としての第一期の四年間は、文京キャンパスの再開発に力を注いだ時期でした。

それまで商学部と政経学部は、収容人数の問題から、一、二年生時は八王子国際キャンパスで学び、三、四年生時になると文京キャンパスで学ぶというシステムでした。しかし、学部において学年割をすることはよろしくないという結論に至りました。それは、後輩が同じキャン

ンパスで先輩の姿を見るということが大事だからです。先ほどもお話したように、昔は先輩の姿を見て海外へ飛び出していこうとする学生が多かったです。また、四年生になったら就職活動だ、という姿を見ることも大事です。本校は、インターネットやテレビで教育しているわけではありません。ですので、キャンパスという場の臨場感を大切にしていかなくてはなりません。そうやって人材を育成する。現在言われているキャンパスの都心回帰だけではなく、キャンパスの一貫教育をするということが目的です。

これが私の理事長としての第一期でした。そして、第二期の四年間では、「教育ルネサンス2020」を開始しました。

——「教育ルネサンス2020」とはどういう事業なのでしょう。

福田 文京キャンパスの建物をリニューアルして、勉強の場が整いました。次は教育の質の向上です。二〇二〇年に本校は一二〇周年を迎えます。東京オリンピックも開催され、日本が世界から注目を集める年でもあります。これからの社会に求められる人材として、学生一人ひとりが国際的視野を持ち、積極的にチャレンジしてい

くタフな人間力を身につけたグローバル人材、それが「拓殖人材」であり、そのような学生を育てるため、学長を中心に教職員が一丸となって大学改革を始めました。それが「教育ルネサンス2020」です。

大学教育において、専門性を持たせることはこれまでと同様にとても大切なことです。そして、国際力、先ほどお話したように海外留学の後押しと外国人留学生の受け入れをし、社会のニーズに合った多様性に富んだ国際人を育成する。それと同時にこれからの時代に必要なのは人間力です。人生何事も計画通りに進むわけではありません。思わぬところから幾度となく試練に直面する。これが人生です。そうした実社会でのあらゆる困難に立ち向かう力。これがまさにこれからの日本で問われる課題です。

今回のテーマが「時代の大転換期」とお聞きしました。ネットやビッグデータ、そして少子化、外国人労働者の受け入れ、まさに日本がこれから直面する大きな問題でしょう。そうした困難な時代に個人の考えをきちんと養い、自ら課題を発見して解決にチャレンジしていくタフな人材を育てる——。こうした人間力を養うことも目標にしています。

——確かに、実社会に役立つ教育は今後ますます必要となりますね。

福田 大学と言えば、昔は講義中心でした。そして学生が卒業すると、企業が一から社員教育をしたものです。しかしいま、企業にはそのように学生を育てる余裕がなくなってきました。そういったことを大学でやって欲しいという声が年々強くなっています。本校はこれまでも実学を重んじてきましたので、大学と業界、企業と組んでさらに多くの取り組みができないか考えてきました。中曾根康弘氏が本校の総長をされていた時に、本校ではいち早く「産業と人間」という授業を設けました。大学が即戦力をつくることを目標に、政治、経営、科学、スポーツなど各分野で活躍されている専門家の方々をお呼びして実務的な授業を行ってきたのです。この授業は、二〇一八年でちょうど五〇周年を迎えました。

——ビジネス界の要請や変化で大学が即戦力をつくる。いまではいろいろな大学でもそれに対する取り組みがなされてきましたが、拓殖大学では今後どのような計画をお考えですか。

福田 最近では、本校の卒業生であるハードオフ(HARD OFF)コーポレーション株式会社代表取締役会長

の山本善政氏が、当時、一般社団法人日本フランチャイブズチェーン協会(JFA)の会長を務めていました。そこで、日本初の「フランチャイズについて」の講座を大学で開きたいというお話をいただきました。そして、山本氏を中心に、JFA会員である㈱セブンイレブン・ジャパン、㈱ローソン、㈱ファミリーマートやダスキン等の会長、代表取締役社長の方々にご登壇いただき、学生にフランチャイズの展開とシステムや商品開発、メニュー開発、マーケティング・プロモーションなど様々な講義をしていただきました。授業では商学部専任教員が立ち会い、学生たちのフォローもしております。

さらに、二〇一八年から野村證券株式会社の寄附講座「経営特殊講義(金融ビジネス研究)」も開設しました。「投資信託」の仕組みとそのメリットやそれに伴う様々なリスク、投資家の心理と行動など興味深い授業も行っております。また、これから必要となるであろうライフプランと資産形成などの授業も行っております。

——最近では、学生や教職員が中心となった「オレンプロジェクト」など様々な企画を目にするようになりました。

福田 「教育ルネサンス2020」もほぼ終わりを迎

え、次は「2030 教学経営会議」が始まっています。オレンジは拓殖大学のシンボルカラーです。そのシンボルカラーを名前に冠した「オレンジプロジェクト」とは、国際交流はもちろんのこと、スポーツオーブンキャンパスや就職支援、そして女子学生たちを中心とした「OMOTENASHI Girls」を結成して、女性にとって過ごしやすい施設設備やマナー講座など女子目線から行う拓殖大学の改革事業です。また、彼女たちが中心となって本校の国際学部農業総合コースの学生が育て収穫した野菜と、北海道短期大学生が栽培した野菜を使用した料理教室も開催しています。

さらに「オレンジプロジェクト」では、文京と八王子両キャンパスで近隣とのコミュニティ形成の促進も始めています。3・11 東日本大震災では尊い命がたくさん失われましたが、こうした教訓を受けて、両キャンパスに地域連携センターを設立し、防災の取り組みを強化して自治体との連携を推進しています。地域に密着し、愛される大学づくりもこのプロジェクトの大きな目標です。

——こうした取り組みは、職員の方が中心となって行われていますね。

福田 はい。こうした取り組みの中には、教員だけで

なく職員にも学生と触れ合う機会を設けました。教員が学生と接するのは当然のことですが、職員にも、なぜ大学で仕事をしているのか、ということをもう一度考えてほしいと思っています。机に座ってパソコンと向き合うのも仕事のひとつとして大切なことですが、ここは企業ではなく、学生を育てる大学です。せっかく大学にいるのだから、学生と直に触れ合い、そして学生ももっと大人と接して様々な見聞を広げてほしいと願っています。

「オレンジプロジェクト」は、約三〇人の若手職員から始まり、今では約七〇名の職員が参加して、一緒に頑張ってくれています。一九五〇年代に本校の総長であった矢部貞治先生は、大学は学園共同体だとおっしゃっていました。まさに、教職員、学生、卒業生が三位一体になることです。これが拓殖大学の理想の形だと考えています。

昔と今の拓殖大学

——理事長も本校の卒業生と伺っておりますが、理事長の学生時代についてお話しいただけますか。

福田 私も拓殖大学出身で商学部を卒業しました。学

生時代はちょうど六〇年安保闘争と七〇年安保闘争の狭間の時代で、とにかく学生運動が激しく行われていました。拓殖大学には安保闘争に加担している先生はいませんでしたので、学生運動はなく、ある意味とても自由な環境でした。そのため、極端な思想に侵されることもなく、多くの学生が海外に大きな興味と希望を抱いて海を越えて行きました。そうした学風に私も大きな影響を受けたことを覚えています。

拓殖大学に入学してまず興味を持ったのは、一年生の時に受けた英連邦の授業でした。その時の先生がとてもおしゃれで緑のネクタイなんかして、とても印象的だったことを覚えています。その授業を受けたのはちょうどケニアが独立した頃でした。ですので、もう勉強にのめりこんで、海外に興味を持って心を躍らせていました。

二年生の時は、佐藤慎一郎先生の東洋史の授業にとっても心惹かれました。中国の近代史を勉強して、私も海外に出て何かをしないといけないという気持ちになり、四年生の夏休みに船に乗って香港と台湾へ旅行に行きました。

ある方が当時の拓殖大学について面白い表現をされたことがあります。たとえば、東大の学生と早稲田大学

の学生と拓殖大学の学生がいて、インドネシアについてレポートをまとめなさいという宿題を出したら、東大の学生は一週間で仕上げてくる。図書館なんかで調べて、まとめ、提出します。次に早稲田の学生は一カ月で仕上げてきます。夏休みなどにインドネシアのジャカルタに行つて調査してレポートをまとめてくるのです。最後に拓殖大学の学生はと言うと、インドネシアの奥地まで入り込んで、そのままそこに住み着いてしまふ、って言うんですよ。まさに拓殖大学を表した言葉だと思います。

今も、台湾や香港、インドネシア、ロサンゼルス、ミャンマー、マレーシアなど海を渡つて、スーパ―を開いたり、起業したりと多くの学友が現地で活躍しています。

——最後に、今後の海外事情研究所と隔月刊誌『海外事情』はどうあるべきでしょうか。

福田 矢部貞治先生が総長をされていた一九五五年に海外事情研究所が作られました。海外事情研究所は、理論だけでなく現地で見識を養われた多くの専門家の方を集めて研究活動に取り組んでもらっています。地域情勢に主眼を置いた研究、これが海外事情研究所の一つの誇りです。また隔月刊誌『海外事情』も地域研究を中心に理論だけにとらわれない、実際に起きていることを書き

てもらう。これが『海外事情』の大きな魅力であり、まさに本校が大切にしている実学教育です。そして、これこそが学生を惹きつけ、学習意欲を高める大きな原動力になると信じています。この『海外事情』は、拓殖大学のステータスでもあります。今後大いに研究成果を上げてほしいと期待しています。

——どうもありがとうございます。

(聞き手＝編集部、二〇一九年一月一四日収録)

『海外事情』一一・一二月号の紹介

巻頭言／洪沢栄一と後藤新平学長

所長インタビュー③

いま、日本外交に何が必要か

川上高司
松川るい

特集Ⅱ混迷する中東　すべて読み解く

トランプ政権の中東政策

最近の中東における勢力均衡の変化

「イスラム国」と過激化の一考察

東京オリンピックへ向けた国内外のハラル状況

中東の調停役オマーンの外交政策

イスラエルに学ぶ

流動化が進む北アフリカの政治情勢

日本国憲法と自衛官

日本海に向こう岸／

デジタルファシズムとアナログファシズム

東南アジアの明日／現地調査の楽しみ

世界最新アネクト／See Evaluator

日本外交今昔物語／在ベルー日本大使公邸占拠事件と

橋本龍太郎

丹羽文生

イスラーム研究所だより／田中逸平先達の巡礼

書評／Heng Samrin, *The Peoples Struggle: Cambodia Reborn*

森 伸生
名越健郎

『海外事情』第六七巻(二〇一九年一・二月号～二・三月号)総目次

※バックナンバーのご注文は、拓殖大学研究支援課
(〇三―三九四七―七五九七)までご連絡ください。